

平成30年11月30日
バンコク産業情報センター
鈴木 太郎

一般調査報告書

バンコクの新たな商業施設「**ICONSIAM**（アイコンサイアム）」の開業について

バンコク都心には、「サイアムパラゴン」や「セントラルワールド」といった多くのデパートがあり、タイ人はじめ周辺国からタイを訪れる多くの観光客で賑わっていますが、今年**11**月、新たな大型複合商業施設「**ICONSIAM**」がバンコクにオープンし、内覧会がありましたので、今回、その概要について報告したいと思います。

今回オープンした「**ICONSIAM**」はチャオプラヤワー川の西岸に位置し、周辺には、王宮や、エメラルドの仏像で有名な「ワットプラケオ」、涅槃像のある「ワットポー」といった多くの観光資源があります。また、2012年にオープンした商業施設「アジアティークリバーフロント」や、「マンダリンオリエンタル」、「シャングリラ」など滞在型ホテルもある観光スポットになります。

新たな商業施設は、都心からリバーサイドへ国内外の観光客を呼び込む官民共同プロジェクト「リバーマスタービジョン」の中核としても位置づけられたものです。

行き方は、高架鉄道（**BTS**）シーロム線のトンブリ駅からシャトルバスが出ている他、同線のサパーンタクシン駅からボートで行くこともできます。また、トンブリ駅から「**ICONSIAM**」に直結する **BTS** ゴールドラインの建設も現在始まっており、完成予定の1年後にはさらにアクセスが便利になる予定です。

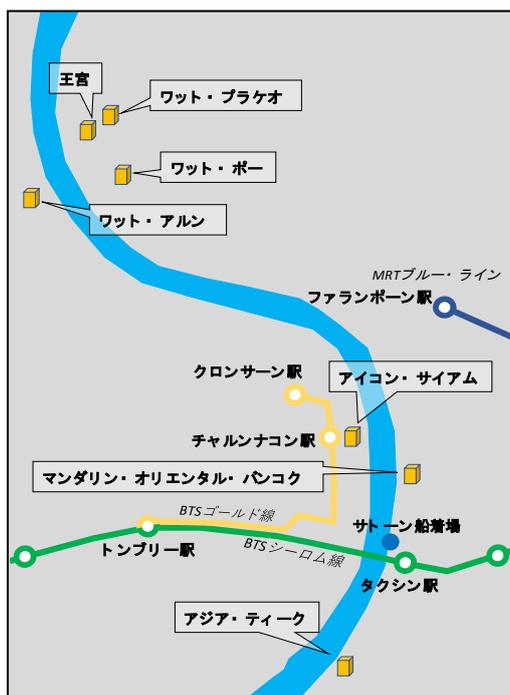
(川から見たアイコンサイアム)



(建設中のゴールドライン)



(周辺地図)



「ICONSIAM」の開発は、タイ財閥のCP(チャロンポカパン)グループなどが事業主体となり、約8万㎡の敷地面積に商業施設に加え高級レジデンスを開発する計画で、総事業費は約1,800億円規模とのことです。

商業施設は大きく専門店ゾーンと百貨店ゾーンに大きく分かれており、専門店ゾーン(ICONSIAM)は、吹き抜けの斬新なデザインで、タイで初めての出店となる「アップルストア」が出店している他、世界的なファッションブランドに加え、「ロフト」や「ユニクロ」といった日系店舗、さらには、「ベンツ」や「BMW」、「トヨタ」などのショールームも出店しています。

UG階、G階には、タイの水上マーケットをイメージしたフロアがあり、タイの各地方のお土産店や、タイの民族衣装を借りるお店も出店しており、タイの雰囲気を感じながらショッピングを楽しめるようになっています。

(アップルストア)



(専門店ゾーン)



(水上マーケットフロア)



一方、百貨店ゾーンは、タイで初めての出店となる高島屋が入っており、専門店ゾーンとは各フロアがつながっています。

スタッフは日本式の接客挨拶を行うなど日本の百貨店スタイルで運営されており、食料品、化粧品などバンコク最大規模となる約180の日系ブランドが出店しています。

各フロアを見てみますと、G階、UG階には、日本の和食店やカフェの他、食料品販売スペースに築地の鮮魚店や精肉店として名古屋でも有名な「スギモト」さん、そして北海道の物産店舗「北海道どさんこプラザ」なども出店しています。

(食品店)



(北海道どさんこプラザ)



M階は化粧品フロア、1、2階は、女性向けのフロア、3階は男性向けのフロアとなっており愛知県の「御幸毛織」さんがオーダーメイドの紳士服店を出店しています。

4階はキッズ、リビングと、全7フロアの構成となっています。

(化粧品フロア)



(女性向けフロア)



(御幸毛織ショップ)



バンコクでは、現在、BTSやMRTといった鉄道の新路線建設や延伸工事が進んでいますが、将来的には、ドンムアン空港とつながるレッドラインや郊外と都心を結ぶパープルラインと、「ICONSIAM」のゴールドラインを繋ぐ計画となっています。これら鉄道インフラが完成すると、チャオプラヤワー側の東側に比べ、これまで開発が遅れていた西

岸（トンブリー地区）へのアクセスが大きく向上することから、この地区の発展の起爆剤としても大変期待されており、すでに不動産の価格も大きく上昇しているそうです。

バンコクでは、この他にも新たな商業施設開発の動きがあり、スクンビット地区では、プロンポン駅に直結する「Emporium」、「Emquartier」の2つのデパートに加え、さらに3つ目となる「Emsphere」の建設が2020年の開業に向け始まりました。

また、在タイ日本大使館の近くに、チャンビールで有名なタイビバレッジを中核にもつTCCグループが、商業施設に加え、オフィス、ホテル、レジデンス、文化施設などが入る約17万㎡もの大規模な複合施設「One Bangkok」を建設中で、2025年のオープンを目指しています。

現在タイは、経済対策もあり、停滞感のあった景気に回復の兆しが見え始めています。こうした官民プロジェクトやインフラ整備の進展とともに、日本企業にとっても新たなビジネスチャンスの可能性が広がっていくのではないのでしょうか。

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。

バンコク産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力しておりますが、その正確性を保証するものではありません。

本情報の採否は読者の判断で行ってください。

また、万一不利益を被る事態が生じましても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。